

目 次

はしがき

1 アメリカ

- 1 アレクサンダー・ビッケル
『最も危険性の少ない政府部門、政治に裁かれる
最高裁判所』 阿川尚之 1
▶ 米国憲法史に見る、ビッケルの思想の背景
- 2 ジョン・ハート・イリー
『民主主義と不信——司法審査の理論』 黒澤修一郎 15
▶ 民主主義を基軸とした司法審査の規範理論
- 3 オリヴァー・ウエンデル・ホームズ Jr. 『コモン・ロー』
▶ 法の生命は論理ではなく、経験であった 金井光生 23
—— 法という物語の歴史的行為性
- 4 トマス・エマスン 『表現の自由の体系』
▶ 表現の自由の「体系」の希求 奈須祐治 32
—— アメリカ表現の自由理論の基礎形成とその継承・発展
- 5 ロナルド・ドゥオーキン 『権利論』
▶ 法概念論争・正義論争の一震源地 横濱竜也 41
—— 政治理論のひとつとしての法理論
- 6 リチャード・ポズナー 『法の経済分析』
▶ 「法の経済分析」の誕生 山下徹哉 49
—— 法学研究としての法と経済学へ
- 7 マーク・タシュネット 『裁判所から憲法を取り上げる』
▶ 独立宣言や憲法前文の理念を裁判所に頼らず実現する
ためのポピュリスト憲法論 清水潤 57

8	ブルース・アッカーマン『アメリカ憲法理論史 ——その基底にあるもの』 ▶アメリカのアイデンティティの探求 ——憲法史への弁証法的アプローチ	松尾陽	66
9	サンフォード・V・レヴィンソン 『我らの非民主的な憲法——合衆国憲法のどこに問題があるのか（そして我ら人民はどのようにそれを正すことができるのか）』 ▶「鉄の檻」としての合衆国憲法？	吉川智志	74
10	キャス・サンスティーン 『目の前の事件を一つずつ着実に——アメリカ連邦最高裁の司法ミニマリズム』 ▶原則として漸進的な司法判断がなされるべき ——裁判所の限界を踏まえた現実的かつ柔軟なアプローチ	御幸聖樹	84
11	エイドリアン・ヴァーミュール『憲法というシステム』 ▶憲法はシステムとして作動する ——セカンド・ベストの憲法理論	吉良貴之	92
12	リチャード・ファロン Jr.『憲法上の権利の性質』 ▶「憲法上の権利」とは何か——その司法的实践に向けて	尾形健	100
13	ジャック・バルキン『生ける原意主義』 ▶憲法解釈のフュージョン——生ける憲法と原意主義の共存	大林啓吾	108
14	ロバート・ポスト『デモクラシー・専門的知識・アカデミック・フリーダム——現代国家のための修正第1条法学』 ▶“デモクラシー vs. 専門家？”——専門知のあり方をめぐって	盛永悠太	116
15	ローレンス・レッシング 『CODE——およびサイバースペースのその他の法』 ▶サイバー法とアーキテクチャ論の始発地	瑞慶山広大	126

- 16 ジェレミー・ウォルドロン『立法の尊厳』
▶立法の意義について考える 檜垣伸次 134
- 17 キャサリン・マッキノン『たかが言葉』
▶ポルノは差別行為である——言論の自由と平等の緊張？ 菅谷麻衣 143

2 イギリス

- 18 ジョン・ロック『統治二論』
▶古典的リベラリズムの礎石 森村進 152
- 19 アルバート・ヴェン・ダイシー『憲法序説』
▶イギリス・コモンロー憲法の「正統派」理解 上田健介 160
- 20 H. L. A. ハート『法の概念』
▶法哲学のフレッシュ・スタート 濱真一郎 169
——近代国家法の基本的な特徴・構造の解明
- 21 アイヴァー・ジェニングス『法と国家構造』
▶異端の書——イギリスにおける Constitution の語り方 柴田竜太郎 178
- 22 ジョン・ローズ『コモンロー憲法』
▶イギリス憲法の「素晴らしい新世界」？ 岩切大地 186
- 23 ヴァーノン・ボグダナー『イギリスの新憲法』
▶成文憲法典が存在しない国の憲法 江島晶子 194
——何が憲法であるのか
- 24 ロドニー・ブレイジャー『憲法慣行〔第3版〕』
▶イギリス統治構造に関する法と慣行 原田一明 202

3 ドイツ

- 25 ハンス・ケルゼン『純粹法学〔第2版〕』
▶実定法を「純粹」に観察するとどうなるか 毛利透 213

- 26 カール・シュミット『憲法理論』
 ▶憲法という学問領域の拡張と整序 石塚壮太郎 221
 ——二項対立の危険な試み
- 27 コンラート・ヘッセ『ドイツ憲法の基本的特質』
 ▶戦後ドイツ憲法学の標準的な体系的概説書 生田裕也 230
- 28 ペーター・ヘーベルレ
 『基本法19条2項にいう基本権の本質的内容の
 保障〔第3版〕』 片桐直人 238
 ▶制度的基本権論
- 29 ボード・ピエロート／ベルンハルト・シュリンク
 『基本権——国法Ⅱ』 齋藤暁 247
 ▶憲法ドグマティクによる基本権審査の「正典化」
- 30 ロベルト・アレクシー『基本権の理論』
 ▶『原理』としての基本権 柴田憲司 255
 ——法的構造の『分析』を重視する基本権解釈の総論
- 31 クリストフ・メラース『論拠としての国家〔第2版〕』
 ▶国家概念から民主主義へ？ 山田哲史 263
- 32 マティアス・イエシュテット／オリヴァー・レプシウス／
 クリストフ・メラース／クリストフ・シェーンベルガー
 『越境する連邦憲法裁判所』 辛嶋了憲 271
 ▶学問から司法への投球
- 33 ヴォルフガング・ベッケンフェルデ『国家・社会・自由』
 ▶変動する国家における憲法解釈論 實原隆志 279

4 フランス

- 34 ジャン＝ジャック・ルソー『社会契約論』
 ▶政治共同体の創設と国制の設計——政治法の諸原理 只野雅人 288

- 35 ドミニク・ルソー『憲法とラディカルな民主主義』
▶憲法の力で民主主義を再生させる 山元一 296
- 36 ミシェル・トロペール『国家の法理論のために』
▶法と国家を根本的に考えるために——理論と歴史の交錯 南野森 305
- 37 ルイ・ファヴォール『憲法と憲法裁判官』
▶法律学としての憲法学——エクス学派の確立 堀口悟郎 313
- 38 オリヴィエ・ボー『国家権力』
▶EUを前に、まず憲法学のメスを研ぎ直す 岩垣真人 322
——主権論と憲法制定権力論の再構成
- 39 ギヨーム・サクリスト
『憲法学者の共和国——フランスにおける法学教授と国家の正統性（1870年～1914年）』 奥村公輔 330
▶共和国と結びついたパリ大学政治学的憲法学者の誕生と終焉
- 40 フランシス・アモン／ミシェル・トロペール／
ピエール・ブリュネ『憲法〔第44版〕』 小川有希子 340
▶最も長い歴史をもつ法学部の教科書

5 イタリア

- 41 ジョルジョ・アガンベン『例外状態』
▶現代民主国家における統治の奥義 江原勝行 348
——法治国家と例外状態の相補性
- 42 サンティ・ロマーノ『法秩序』 芦田淳 356
▶イタリア制度理論の原点——多元化する社会の法理論化

6 カナダ

- 43 ピーター・ホッグ『カナダ憲法』 富井幸雄 364
▶カナダ最高裁で最も引用された書

- 44 ケント・ローチ『裁かれる最高裁判所——司法積極主義か民主的対話か』
 ▶カナダ最高裁判所は司法積極主義の立場に立っているのか
 白水隆 372
- 45 デイビット・ダイゼンハウス
 『法に内在する憲法——危機時代の合法性』
 ▶危機状況における法の支配とその実現者たち
 高木康一 379
- 46 ラン・ハーシュル
 『都市・国家——立憲主義と巨大都市』
 ▶巨大都市の憲法感と憲法力
 ——都市と憲法の関係を切り拓く
 大林啓吾 388

7 韓 国

- 47 成樂寅（ソン・ナギン）『憲法學〔第23版〕』
 ▶旧司法試験時代からの流れを汲む「最後の」大型基本書
 水島玲央 395

8 オーストラリア

- 48 シェリル・サンダース／エイドリアン・ストーン編著
 『オーストラリア憲法 オックスフォード・ハンドブック』
 ▶オーストラリア憲法の多面的・総合的考察
 藤井樹也 403
- 49 ロザリンド・ディクソン編『オーストラリアの憲法価値』
 ▶オーストラリアにおける憲法価値と機能主義的憲法解釈
 手塚崇聡 412

- 事項索引 420